

国際シンポジウム参加記

今回のシンポジウムは、イベリアとマグレブのあいだで相互にうみだされた自己／他者認識の交錯、折り重なりを、国民国家の形成という歴史的過程に照らしつつ検証することを目的としている。おもにスペインとモロッコに焦点がすえられてはいるが、コメンテーターにフランスとラテン・アメリカの専門家を配して、幅の広い議論のできる土台が準備された。全体としては、ある種の緊張感のただようなか、さまざまな論点を提示し、今後の課題を明らかにしえたという意味で、たいへん有意義なシンポジウムであったといえるだろう。

この種のシンポジウムがともなう緊張感は、そもそも自己／他者表象なるものがマテリアルな力関係を磁場として産出されることを考えるとたしかに避けようもないことである。とくにスペインとモロッコの関係のようにそれが植民地主義の問題に深く絡み取られており、そうした状況が現在でも完全には解決していないと思われる現状にあっては、当然のことであろう。当日も議論になったことであるが、それはいうまでもなく日本の歴史のかかえる問題でもある。そしてじつにそのような現状こそが、こうしたシンポジウムを要請するのである。

しかし、たしかに自己／他者表象がヘゲモニックな力関係のなかで産出され、流布されるのだとしても、そうした力関係を、植民地主義や帝国主義や旧宗主国の責任などの言葉に集約して言い尽くせるのかといえ、そうではあるまい。ジビルー氏がいうように、文明化の名の下に植民地化をおこなうというのはたしかに馬鹿げたことであり、その場合の文明化とはヨーロッパ中心主義以外のなにもものでもない。だが同時にそのジビルー氏の報告は、モロッコ文学、ひいてはアラブ文学の全体にとって、グラナダとガルシア・ロルカが、自己表象のためのすぐれて象徴的トポスとなっているというものであった。彼らにとってアル・アンダルスは、自己を自己たらしめる歴史とアイデンティティーの延長であり、それは自らを新しく受け入れてくれたブラジルやアルゼンチンといった土地を新しいアンダルスにしてしまうほどであったというのである。イベリアとマグレブの 8 世紀にわたる交流のはてに、ジビルー氏にとってスペインとモロッコは「二つの国民性をも一つの文明」を形成するにいたったのである。ここで述べられているのは安易で性急な和解や混交性の賞揚では全くない。自己が他者を指定することによって形成されるさま、そしてそのようななかで記憶が想起されていくさまをひとつひとつ検証することが、植民地主義や帝国主義や責任という言葉を空虚なものにしないための不可欠な作業なのである。そうした作業の到達地点を報告しあい、次へとつなげていくこと、それが、今回のようなシンポジウムの意義ではないだろうか。

そのことを確認したうえで、提起された論点や課題を、かなり限定された視野からで

はあるが、以下に整理してみよう。だがその前にひとつだけ、シンポジウムのタイトルにある「他者表象」とは何かについて思うところを述べておきたい。当日の議論を思い起こしつつ筆者なりにいえば、問題となるのは、ある力関係のもと、自分が対峙している相手を膨らませたり萎ませたりしながら特定のイメージを造型することで（シンポジウムのなかで使われたことばでいえば「風船のように」）、「自己」が打ち固められていくプロセスである。そのように造型される相手を、われわれは「他者」と呼んでいる。そして自己が他者に照らされるように伸縮し、時間軸や空間軸に定められたときに、国民の来歴や主権の及ぶ範囲が確定されるのである。

そうした自己 / 他者表象がもっとも先鋭的にあらわれる場のひとつが、当日も主要なテーマとなった呼称の問題である。フランス人の考えるところでは、アルジェリアの現地人には二種類ある。ベルベル人とアラブ人である。それはフランスの自己認識にとって中核的な位置を持ち続けてきた古代ローマに遡る記憶が想起され、19世紀の文明化の使命イデオロギーにとって都合のよいかたちで編成された結果である。またスペイン人にとっても、モーロ人は、文明と野蛮の対立軸に沿いつつ、良いモーロ人と悪いモーロ人に分かれる。深澤氏やコラーレス氏も示唆するように、それがスペイン内戦期には内部における他者表象と絡み合いつつ特定のイメージを産出していくわけである。またあるときには、オスマン帝国の改革派にたいする共感を示しつつ、同時に極めて否定的なモロッコ人の表象をうみだしていく、などということもおこる。フロアからは、イスラミスタやマホメターモスなどの呼称についても質問があがったが、これも呼称というかたちの表象の産出を問題にしたものである。他者を分断することで自己を成型するこうした方向に対しては、否定的な他者を一括して措定するという方向も存在する。コラーレス氏によれば最終的に優勢となるのはどうやらこちらのほうであるようだが、ここでは、例えばモーロという言葉で、ムスリムの全体が指し示される。ジビルー氏が挙げている例でいえば、このようにして、パキスタンのムスリムはモーロ人になるのだ。言葉と政治的現実の結びつくこのような修辭的空間のなかにあって、70年代以降にはムスリムはテロリズムと容易に関連づけられるようになっていくのである。

スペイン人やフランス人が自己を打ち固めるさいに動員した、その当の対象にとっても、こうした修辭的空間は無縁のものではない。そもそも今回のシンポジウムは、そのような双方向的な鏡像的關係をこそ問題にしていたのである。ベルベル人は独立戦争後にイスラーム色を強めたアルジェリアに影を落とし、スペイン内戦下のモロッコ民族主義者はある種の居心地の悪さと警戒心を覚えつつもフランコに答えた。そして一枚岩的な他者を想定する向きにたいしては、開会の辞で紹介された2004年3月11日の大量殺人の首謀者とおぼしき者の言葉、「スペインはアル・アンダルスからイスラーム勢力を追

放し…」が不幸にも呼応する。

力関係は、表象の産出にのみ作用するわけではない。その流布の過程においてもそれは考慮されなければならない。先に述べた呼称とかたちの表象の産出も、ヘゲモニックな力の配分を受けているのである。これらのことは、とうぜんシンポジウムの場合全体の了解事項に属するものであろうが、その点を一貫して問題にされたのは深澤氏であった。世界中の誰もがゲルニカでおこったことを知っているのは、攻撃されたのがヨーロッパ人だったからである（そしていうまでもなくピカソの名声ゆえである）。ではリーフ戦争における殺戮や毒ガスの使用が知られていないのはなぜか？ このような視角から、われわれはさまざまな問いかけを次々に発していくことができるだろう。例えば、現在の世界におけるさまざまな悲劇のなかで、とりわけ9・11が新たな時代区分の指標となるほどの象徴的価値をおびる言葉となってしまったのはなぜなのだろうか。先のゲルニカの事例は、司会のほうからの質問、他者イメージにとって最も有効だった媒体は何か、に答えてのことであるが、これは表象の産出のみならずその流布における力関係をめぐる問いでもあると考えることもできる。同じくその問いに、ジビルー氏はテレビやラジオなどの情報、貿易のさいの対人的な接触に並んで、旅行記を挙げられた。それはひとつのイメージを産出し、流布させる。そしてその著者が大作家であれば、その影響力の大きさについては容易に推測できようというものである。

自己/他者表象の産出と流布にはたらくこうした力関係こそ、イベリアとマグレブのあいだで、またそれぞれの内部で、われわれがみすえるべきものである。それはフランスやラテン・アメリカやオスマン帝国やサハラを巻き込み、ローマやアル・アンダルスの記憶と絡まり合い、作用している。このような交錯をひとつひとつ丁寧に解きほぐしていく作業は、緒に就いたばかりであるといっても過言ではあるまい。そしてこのような作業を遂行するにあたって注意すべきなのは、自己が自己であるために他者を収奪することのない、そうした可能性を探るといった倫理的、政治的な要請によってそれがしかとつなぎとめられるべきだということであろう。コラーレス氏は最後にこう述べられたのではなかったか。「われわれは、自らが教育を受けた文明やその価値にたいする批判をとおしてしか他者を理解することができない。それはわれわれに最も親しい者たちを批判するという辛い作業だ。だがそれは彼らに対立することではなく、われわれの自尊心を守るためである」と。